

# 日本語集中Aプログラムにおける専門の発表のあり方 —2009年後期の試行から—

埴田美有紀

キーワード：日本語集中Aプログラム、初級、発表

## 1. はじめに

文部科学省の奨学金を受ける国費留学生は、来日後の半年間は日本語を集中的に学ぶことが義務となっており、長崎大学留学生センターの日本語集中プログラムはその国費留学生たちを主な対象として開講されている。以前は半年後に他大学に配属される留学生も受け入れていたが、他大学にも留学生センターができ、長崎大学に配属される留学生だけがこのプログラムを受講するようになった。また、来日前から指導教官と連絡を取っていたり、集中日本語プログラム在籍中でも日本語の授業以外の時間は研究室で過ごしたりする留学生も少なくなってきた。また、留学生センターが全国各地に設置され、長崎大学に配置される国費留学生の数が減少したことから、大学交換留学生や研究生など、国費留学生以外の留学生も受け入れるようになった。当然、こうした留学生は日本語の授業以外の時間を研究室で過ごすことが多い。こうした変化を踏まえ、できるだけ多くの学生が集中コースに参加できるよう、2009年前期から一日3コマ行っていた授業を一日2コマにし、午前中で終われるようにした。(ただし、週に一度だけ、午後の漢字クラスを選択で受けることができる。) こうして、午前の日本語の授業は文法クラスのみが行われることになった。

日本語集中プログラムが始まって以来、プログラムのまとめとして、専門の発表を行ってきたが、上記のように日本語の授業コマ数が減り、国費以外の学生も受講するようになるなど、留学生センター開設当初とは発表を行う状況が変わってきている。この変化に合わせて専門の発表の方法やテーマ設定などを見直さなければならない時期に来ているのではないだろうか。本稿では今までの方法と2009年度後期に試行した専門の発表の準備の方法を報告

することにより、今後の専門の発表のあり方について考察を行いたい。

## 2. 2008年後期まで～専門の発表の本番までの流れ～

2006年後期までの専門の発表は、授業期間中は午後に行われる技能クラスで専門の発表に役立つことを考え、コンピュータの使い方、作文の構成、発表などを取り入れていた。さらに、期末試験後一週間で、専任教員5人が原稿、発音、リハーサル等のチェックにあたっており、準備は午後まで行われることも多かった。

筆者がコーディネーターになった2006年前期は月曜日に期末試験を行い、その次のコマに専門の発表の概要を説明し、火曜・水曜は原稿作成とチェックをし、発表で使う言葉で難しそうなもの、キーワードとなるもののリストを作成させた。そして、木曜日にリハーサルを行い、金曜日に本番を行った。2006年後期は月曜日が祝日で、期末試験が火曜日となったため、期末試験の次のコマに概要説明をし、午後から準備に入り、木曜日にリハーサル、金曜日に本番と慌しかった。この期は大使館推薦が2名、大学院交換留学生在が5名、研究生が1名であり、どの学生も年明けから研究に忙しくなった。また、大使館推薦の留学生と研究生は大学院の試験の準備が本格的に始まったため、専門の発表の準備として、授業外で課題を課されても十分にはできていないことがあった。

2007年前期からはコーディネーターである筆者のみで発表の準備を担当することになった。この期は大使館推薦が1名、ドクター在籍の留学生在が1名であったので、2006年後期に在籍した留学生的の専門の発表に対する態度から、専門の発表を行わないことにした。しかし、在籍した留学生から、プログラムのまとめとして、また、自分の日本語がどのくらいできるのかを試す場として発表があったほうが良いという意見が出された。そのため、2007年後期から再び専門の発表を行うことにした。

しかし、2006年後期の学生の忙しさを見ているので、期末試験後の日数をできるだけ短くし、できるだけ早く研究に専念させようと考えた。具体的には、9週目、11週目、14週目、15週目の各1コマを準備の時間にあて、期末試験の次のコマにリハーサル、翌日に発表を行った。期末試験までに少しずつ準備をしたことにより、発表内容を吟味する時間がとれたようで、2006年後期までの期末試験後の慌しさが解消された。そのため、次の学期以降も期

末試験までに準備の時間を設けることにした。2008年前期は集中プログラムに在籍する留学生が2名であったので、準備の時間に何度も練習ができると考え、14週目、15週目に1コマを準備の時間にあて、期末試験の次のコマにリハーサル、翌日に発表を行ったが、原稿の作成に時間がかかり、リハーサルが一度しか行えなかった。2008年後期は17週目に1コマ、18週目に2コマを準備の時間にあて、期末試験の翌日の金曜日にリハーサル、土日を休んで月曜日に発表を行った。今回は原稿の作成に時間がかかったため、概要の説明を行ったときに、原稿のたたき台を二回目の準備の日までに作成し、メールで送らせることにした。その原稿に手を加えて、二回目、三回目の準備は原稿の手直しと語彙リストの作成を行った。次の準備の日までに原稿を手直ししておいたことにより、原稿修正にあまり時間を取られなかった。

いずれの期も発表原稿については念入りにチェックができたが、発音については原稿完成時とリハーサル時にチェックする程度で、リハーサル後も原稿や語彙リストを手直しすることがあり、本番で不明瞭な発音の部分もみられた。しかし、この準備期間である程度準備が完了し、発表当日もあまり原稿を見ずに発表でき、質疑応答もある程度日本語でやりとりできていた。

### 3. 2009年前期～コマ数減の影響～

前述のように2009年前期から午後の技能クラスが漢字クラス以外はなくなり、午前の文法クラスのみとなった。2008年後期までは午後の技能クラスで午前中に学習した文法を使ってアウトプットを行っており、それが文法の定着に役立っていたが、そうした機会が午前のクラスのみになってしまった。午後から研究室へ行く留学生も多いのだが、研究室では英語で足りることが多いようで、日本語の授業以外は英語の環境にある学生も少なくない。もちろん、研究室によっては日本語を使わざるを得ない状況になり、アウトプットの能力がかなり高くなる場合もあるが、そういったケースは少ない。このことは、聴解の時間からもうかがえる。今までは午前の1コマを3課分程度の復習と聴解の時間にあてていたが、復習に時間がかかり、1時間内に聴解までは進められなくなったのである。午後のクラスがあったときには午後のクラスがそれまでに習った文法の復習の役割を果たしており、午後のクラスのどこかで絶えず使われる状態であったが、午前のクラスだけではその日までに学習した項目を使う機会は少なく、翌週復習としてとりあげても、学習

項目を思い出すのに時間がかかったようである。さらに、使う練習をしておらず、インプットの量も減ってしまっているのに聴解をすると、聞き取るのに時間がかかる上に、聞き取れても答えを書くのに時間がかかることが多くなった。そのため、今まで聴解にあてていた時間も復習にあてた。結果的にインプットをさらに減らすことになってしまった。

このように、コマ数が減ったことにより、さまざまな影響が見られた。しかし、集中プログラムの予定はプログラム開始前に立てており、そのときには午後の技能クラスがなくなる分、研究室で過ごす時間が長くなり、原稿準備にも研究室の助けが得られるだろうと考え、専門の発表はこれまでの流れを変えずに行ことにしていた。具体的には、15週目の1コマ、16週目の木曜日の期末試験後の1コマ、翌日の1コマを準備の時間にあて、土日ははさんで17週目の月曜日にリハーサル、火曜日に発表という予定を組んでいたのである。しかし、この予定で進めようとしたところ、授業終了の翌日に期末試験を受けるのは大変なので、一日あけて期末試験をしてほしいと学生から要望されたため、予定を変更して、木曜日を試験準備日とし、金曜日に期末試験を行った。そのため、期末試験後の1コマに二度目の準備、土日ははさんで17週目の月曜日にリハーサル、火曜日に発表を行うことになった。専門の発表の日時はコース開始時に伝えてあり、それに基づいてコース終了後の研究の予定をすでに立てていた学生がいたため、発表本番の日が変えられなかったのである。このように、予定では十分な準備期間を設けていたが、実際には1日減ってしまった。こうした準備不足も一因であろうが、発表当日には最初から最後まで下を向いて原稿を読むだけの学生や、何を言っているのか分かりづらい学生がいた。この様子を見て、発表にいたるまでの手順を今までと同様にしていたのでは不十分であることを実感した。

#### 4. 2009年後期～新たな取り組み～

2009年前期の発表の手順が不十分であると実感はしたが、どのように補足していけばいいのか分からない状態であった。そのため、2009年後期は発表の準備のコマ数を十分に取るという対応のみをした予定を組んだ。プログラム開始後の12月に九州日本語教育連絡協議会研修会があり、現実に行われているコミュニケーションと同じことを教室でも行うことにより、話す能力を向上させるという活動があることを知った。この活動を実践した細川他(2008,p.

iv) の教科書の冒頭には、

活動に共通しているのは「対話（クラスの内外を問わず、他者とお互いに考えや意見をやり取りすること）」によって、「自分の考え」をつかみ表現していくということです。これらの活動を通して学生が「自分の考え」を日本語表現できるようになることを目指しています。

と書かれている。

日本語を集中的に学ぶ本コースにおいて、学生にとって日本語はコミュニケーションの手段というよりも、覚えこむもの、という位置づけになっているように思う。ある程度覚えこまなければ表出も難しいのであるが、表出する機会が減ってしまった今、できるだけ教室で表出させる機会を作ったほうがいいのではないだろうか。また、研修会で見せてもらった学期終了後の学習者のインタビュービデオでは、本コースと同程度の課を学習した学習者がかなり流暢に話していた。一学期間表出することだけに集中したクラスで学んでいたのだから、当然と言えば当然なのかもしれないが、これだけ話せる可能性があるのだと知ることができた。

研修会受講後、後期に在籍している学生は活発な学生が多いため、一方的に専門について説明する原稿を作るよりも、他の学生とのやり取りを通して原稿を作り上げていくこの方法があっているのではないかと考えた。また、発表のテーマも自分の専門について説明させるだけでなく、自分の気持ちも伝えるようなテーマにすれば、原稿作成の段階で他の留学生と対話がしやすくなるのではないかと考えた。しかし、専門を学びに来日しているので、まったく専門とは異なるテーマにせず、なぜ自分がその専門を選んだのか、その専門の何が面白いのかをテーマとして提示することにした。このようなテーマなら、聞いている学生が自分の専門外のことを聞いても、専門の内容ではなく、発表者の考えや気持ちについて質問ができ、対話できるのではないかと考えたためである。

このように考え、2009年後期の専門の発表は以下の手順で行った。期末試験の次のコマに発表の概要を説明した後、留学生が発表したいことのポイントを英語でメモ書きして英語でクラスメートに伝え、英語で質疑応答をした。この段階で英語を使わせたのは、初めから日本語で活動を行うには語彙が十

分ではなく、また宿題として日本語で原稿を作成させてそれを発表させても、クラスメートに分からない内容になってしまう可能性があると考えたためである。英語でやりとりさせることにより、この活動の趣旨が理解でき、相手に伝えることに重点を置く必要性を感じてもらうことを意図した。質疑応答では内容自体の説明や、その内容を理解するための背景の説明を求める質問などが出たので、それをもとに日本語で原稿を書くことを宿題にした。翌日、日本語の原稿を読んでもらい、日本語で質疑応答させた。発表を聞いても専門の言葉が分からず、発表が十分に理解できなかつたため、語彙リストがあれば理解ができると提案し、翌日までに語彙リストを作ってこさせた。原稿については発表後、筆者が修正を行った。翌日はクラスメートに語彙リストを配布し、語彙リストを見ながらクラスメートの発表を聞いて、日本語で質疑応答させた。前日より理解が深まり、語彙リストの重要性が感じられたようである。

今までは原稿と語彙リストをワードで作成させ、発表時にはパワーポイントを作らせていたのだが、午後のコンピュータクラスがなくなったため、日本語で原稿を作成するのは負担であろうと考え、原稿も語彙リストも手書きで提出させ、発表時のパワーポイントは必要ではないと伝えた。翌日は祝日で授業がなく、その翌日が本番であった。本番では、本番までに3回クラスメートの前で原稿を読んだので、伝えたいことを明確に発表できていたように思う。パワーポイントは作らなくていいと言っていたが、休みの間に作ったようで、パワーポイントを作らなかつた留学生は一人しかいなかった。作った留学生のうち一人は原稿をそのまま打っただけであったが、残りの学生は発表に必要な画像などを入れ、どうすれば伝わるかを意識して発表していた。語彙リストも、今までは詳しく出して多すぎたり、逆にキーワードしか出さずに少なすぎたりするものがあつたが、クラスメートに分かるように語彙リストを作成するという意識させたため、適量の語彙が提示された。質疑応答も、難しい部分は英語を使っていたが、基本的には日本語で行うことができていた。しかし、1名は緊張したのか、質疑応答の段階になって日本語がまったく出てこなくなつてしまい、英語のみで答えていた。

## 5. 今後の発表のあり方

日本語集中プログラムAコースは技能クラスがなくなった結果、日本語を

産出する活動が極端に減ってしまった。午前の文法クラスでも多少は会話をするが、習った文法を使った練習、といった程度のことしかできない上に、前に習ったことを組み合わせさせた練習をさせようとする、前に習った項目を思い出すのに時間を要することが多くなった。そのため、一人でまとまった日本語を話す、専門の発表のような活動をさせる前に2009年後期に行ったようにクラスメート同士で日本語によって対話をさせる練習が有効であろうと思う。その際に、クラスの様子を見て、初めから日本語だけで対話を行うことには戸惑いが見られる可能性がある場合は、英語で対話をさせ、情報をやり取りすることに焦点を当てる活動であることを理解させてから、日本語でもさせる、というように段階をふむ必要もあろう。

発表のテーマについては、専門の語彙も多少日本語で知っておいたほうが今後の研究に役立つと考えて専門に限定していたが、日本語でまとまったことを話したり書いたりする機会がプログラム期間中に一度もないまま専門の発表をさせるのは負担が大きいという面もある。2009年後期は自分の専門の説明だけではなく、自分の気持ちも話すようなテーマにしたが、学生が自分の伝えたいことを発表するようにしてもいいのではないだろうか。「今までは教えてもらえばかりだったので、この発表では教師に何か教えてください」というような大まかなテーマを与え、教師に伝えたいことを考えさせれば、枠にはまらず、自由により伝えたいことを伝えようとするのではないだろうか。しかし、あまり自由になると、テーマの選定に時間がかかってしまい、原稿作成の時間が少なくなる可能性があるため、どの程度の枠組みでテーマを提示するかは今後考えていく必要がある。

今までは原稿や語彙リストをワードで作成させ、発表当日までにパワーポイントも作らせていたが、原稿を日本語で作成する以上に原稿や語彙リストをワードで打つことに時間がかかることもあった。しかし、今回は日本語の打ち方を教えなかった（2009年前期はWebClassを使ったため、ひらがな入力の方法などを少し教えた。）ため、原稿や語彙リストは手書きのものを提出させた。パワーポイントについては作りたいと思った留学生が作ってきていた。今回ワードとパワーポイントによる作成の負担をなくしたため、原稿や語彙リストをワードで打つ時間をクラスメートとの対話の時間にあてることができ、対話の機会を増やすことができた。特に語彙リストに関しては、クラス内でクラスメートに発表を聞いてもらうときにも使ったため、クラスメート

が自分の発表を聞く手助けになるように、という視点で作らせることができたので、語彙リスト本来の目的を果たしたものができたと思う。しかし、この三つをデジタルで作らない場合、今まで作っていた専門の発表の冊子が作成できないという問題がある。2009年後期は冊子を作らず、発表の映像をDVDに落として留学生に渡すだけになってしまった。記録として残すという意味ではこの三つをデジタルで作成させたほうがいいので、今後、デジタルで作成させるのであれば、プログラム中にワードを使って日本語を打つ方法などを教える時間を設ける必要がある。

今後は集中プログラムに在籍する学生だけでなく、学生数も変化することが予想される。こうした変化に対応し、プログラムのまとめとして実りのある発表になるよう、今後も吟味を重ねていきたい。

## 参考文献

- 細川英雄・蒲谷宏 編、津村奈央・須加和香子・塩谷奈緒子・市嶋典子・武一美 著 2008 『日本語教師のための「活動型」授業の手引き—内容中心・コミュニケーション活動のすすめ—』 スリーエーネットワーク
- 細川英雄 2009 「活動型日本語クラスの実践—より豊かな日本語教育を目指して—」 九州日本語教育連絡協議会2009年度12月研修会資料
- 松本久美子・守山恵子・永井智香子・奥村智紀・宮原彬 2001 「日本語集中コースでの『専門の発表』の取り組み」 『長崎大学留学生センター紀要』第9号 pp.13-52
- 松本久美子・永井智香子 2007 「長崎大学留学生センターにおける日本語教育の10年を振り返って—“研修コース”の変化を中心に—」 『長崎大学留学生センター紀要』第15号 pp.29-44

(留学生センター 講師)